

氏名	寺村 裕史
授与した学位	博士
専攻分野の名称	文学
学位授与番号	博甲第 号
学位授与の日付	平成17年 3月25日
学位授与の要件	文化科学研究科人間社会文化学専攻 (学位規則第4条第1項該当)
学位論文題目	古墳時代の遺跡立地に関する景観考古学的研究
学位論文審査委員	主査・教授 新納 泉 教授 稲田 孝司 助教授 今津 勝紀 助教授 松木 武彦

## 学位論文内容の要旨

本論文は、古墳時代の遺跡の立地と景観について、地理情報システム（GIS）などの手法を用いて検討したもので、古墳からの眺望と集落との関係や、古墳の立地と古墳間の視認関係、前方後円墳の造り出しの位置と見え方、群集墳のなかにおける前方後円墳の位置と眺望の関係、群集墳の形成位置と方位や眺望・ランドマークとの関係、終末期古墳の立地と風水思想との関係などを題材に、遺跡と景観との関係を分析している。

### 第1章 考古学における「景観」に関する研究史と方法論

はじめに、地理学や工学などの関連分野における景観論を概観して「景観」概念を整理し、地形等の客観的なあり方としての景観理解と、認知的な意味の強い景観理解の両者があることを述べ、古墳などの遺跡がどのように見えるか、古墳をどのように見せるかという、人間とのかかわりの強い側面を本論では重視するとしている。それをふまえて、これまで海外や日本の考古学の分野でなされてきた景観研究を紹介し、景観認知の研究にやや恣意的な側面があることを指摘し、GISを用いることによって、より客観的な景観認知の研究が可能になると述べている。最後に、GISの考古学への応用事例の紹介やその意義についてまとめ、GISが今後の景観研究に重要な役割を果たすことを強調し、本論文の視座と分析方法を論じている。また、この論文で用いているGISのソフトウェアについて説明を行い、データの入力や分析の方法について解説を行っている。

### 第2章 古墳の立地と眺望に関する景観分析

この章では、前方後円墳の立地と眺望との関係や、造り出し・埴輪列などの古墳外表施設の景観論的な分析を行っている。第1節では、古墳の立地に関する研究を概観し、眺望などの研究が、十分に検証可能な形で客観的に論じられているとは言えないという現状を指摘した。第2節では、大阪府茨木市周辺の古墳と集落を取り上げ、古墳からの眺望や、古墳間および古墳と集落の視認関係、集落間の視認関係等について、GISによるビューシェド分析を行い、立地と眺望の関係について検討している。前期古墳は、多くの集落との視認関係をもつものではないが、中期・後期古墳は多くの集落に視認関係が広がっている。集落どうしの視認関係は、傾斜の縦方向の視認関係が強く、標高が近い横方向の視認関係は必ずしも強くないという。次に、大阪府古市古墳群を取り上げ、大型前方後円墳相互の視認関係について分析を行っている。前期古墳と中期古墳では眺望の重なる範囲が異

なり、中期古墳のほうがより眺望が開けた場所に立地していることや、時期が下るにつれて古墳からの可視領域は狭くなるが、それまでに築かれた古墳が視認できる場所を選んで古墳が築造されており、視認関係が維持されているという。第3節では、古墳の外表施設である埴輪や葺石を対象とし、景観論的な分析を行っている。前方後円墳の後円部頂に設けられた方形埴輪列が、古いものは埋葬施設の方位と連動しているが、やがて前方後円墳の外観の一環として埋葬施設との連動の関係を失うことを論じている。また、埴輪や葺石が、古いものは埋葬施設を中心とした意識の中で配置されているのに対して、景観を意識した配置に姿を変えていき、集落のある平地など古墳を見る方向に密な埴輪配列や、ていねいな葺石が認められるようになるという。第4節では、前方後円墳の造り出しを取り上げ、古墳のどの位置に造り出しが付設されているかを検討している。左右両側に造り出しをもつ古墳は規模の大きいものに多いことと、前方部を上にしたばあいの墳丘の右側に造り出しをもつ古墳が古墳時代後期に多くなるという傾向を指摘し、前方後円墳の築造方位と関係させてその理由を考察している。

### 第3章 群集墳の立地に関する景観分析

この章では、古墳時代後期を中心に形成される群集墳に焦点を当て、その立地と眺望に関する分析を行っている。第1節で研究史についてふれ、第2節では、前方後円墳を含むタイプの群集墳の典型である、和歌山県岩橋千塚古墳群を取り上げている。群集墳中においても前方後円墳とその他の墳形の古墳との間に立地場所の差異が存在し、眺望や地形において前方後円墳に優位性が存在することや、前方後円墳の築造順に眺望のやや不利な位置となるという変化を論じている。第3節では、小規模円墳と横穴墓が群集する典型例である、奈良県龍王山古墳群をとりあげ、群集墳の築造場所の変化と、眺望および石室開口方向との関係を検討し、平野部への眺望よりも山頂などの特定の対象への向きが意識されていることを論じている。

### 第4章 終末期古墳の立地と景観分析

この章においては、前方後円墳が姿を消し、墓に対する意識が大きく変わってくる時期に当たる、6世紀末から7世紀にかけて造られた終末期古墳を取り上げ、その立地とそこに表れた人間の意識について考察を加えている。終末期古墳は、比較的奥まった傾斜地に単独で築造されることが多く、これまで風水思想の影響を受けた選地がなされているとする説もあったが、GISを用いて古墳の立地と周辺の地形を客観的に評価したところ、必ずしもそうした思想的背景を読みとれるものではないことが明らかになったとしている。また、終末期古墳の場合は、古墳からの「近景域」の範囲を互いに避ける形で立地しているとの指摘も行っている。

### 第5章 古墳時代の遺跡立地に関する景観考古学的研究

これまでの分析を総合し、古墳時代を通じた墳墓を中心とする遺跡立地について、総合的な景観論的考察を行い、その歴史的意義を論じている。前期古墳は、丘陵頂に立地し墳丘の後円部頂に意識が集中するなど、タテ方向の意識があるが、中期古墳は墳丘の横方向からの外観が重視され、後期から終末期にかけては、集落などからの景観が重視されない形に変化していくと論じている。

## 学位論文審査結果の要旨

学位審査会は、2005年1月28日に開催され、学内審査委員4名が参加し、他に約20名の参加があった。審査の結果は以下のとおりである。

本論文は、古墳時代の遺跡の立地と景観について、地理情報システム（GIS）などの手法を用い、景観認知を重視する立場から検討を行ったもので、手法の点でも、研究潮流の点でも、先駆的・意欲的な内容をもった研究と位置づけられる。

地理情報システムの考古学への応用については、日本ではおよそ10年の歴史をもっているが、まだ古墳の立地や景観の分析に適用された例はほとんどなく、景観認知を意識した研究もまだほとんど進んでいない状況にある。そうしたなかで、古墳の立地と景観を対象に、さまざまな側面から本格的な分析を行った、ほぼ最初の研究と位置づけることができる。現状では、地形や遺跡のデータ入力と分析に多大な労力を投じる必要があり、そうした困難を乗り越え多くの分析を実施している点でも、優れた内容をもっている。

本論のなかでは、(1) 後円部頂の方形埴輪列の向きが、墳丘主軸にそろい、南北を向くものから、墳丘主軸に揃わないものが現れ、主軸に揃うが方位に従わないものに変化すること、(2) 後円部頂を重視した埴輪配列から、外部からの景観を重視する埴輪配列に変化すること、(3) 古市古墳群において、既存古墳を視認できる位置に古墳を築くという選地が一貫しているということなどをはじめ、オリジナリティーのある興味深い指摘がなされており、古墳時代を通じた遺跡の立地や景観についての意識の変化に関する大きな流れを予想させる内容となっている。

以上のような本研究のもつ積極的意義が審査委員の共通の認識となったが、次のような問題点の指摘もあった。

景観・空間認識の全体的な枠組みについての整理が十分ではなく、現象は指摘されているが現象の背後に横たわるより深い動きが、必ずしもわかりやすく説明されているとは言えず、後円部頂を重視した埴輪配列から、景観を重視する埴輪配列に変化することの意味などを、より広い視点から位置づける必要があった。

眺望分析の際に、後の時代に築かれる古墳も眺望を妨げる地形として利用してしまっており、本来は後の地形改変を除いた形で眺望分析を行うべきであることや、グラフの読みとり方にやや十分でない点があること、「既存古墳を視認できる位置に古墳を築くという選地」について、より十分客観的に示される必要があることなどである。

他にも、引用文献が不十分な部分の指摘などもあり、景観・空間認識の全体的な枠組みについて、委員等の間でさまざまな議論が行われたが、これまでの研究史の蓄積がほとんどないことや、莫大な労力を分析に投入せざるを得なかったことなどを考慮すると、そうした問題は、今後さらに研究を発展させていく際の課題であり、本論文の意義を大きく損なうものではないという共通の認識に達した。

審査委員会は、以上により、本論文を博士の学位論文として認定することにつき、全員一致で合意した。